JEA
日本疫学会ニュースレター
Japan Epidemiological Association News Letter

平成29年4月15日発行 No.49

第27回日本疫学会学術総会開催を終えて

山梨大学大学院総合研究部医学域社会医学講座
山縣 然太朗

第27回日本疫学会学術総会を2017年１月25日から27日に山梨県甲府市で開催させていただき、無事日程を終了することができました。学会長として御礼申し上げます。

晴天に恵まれ、富士山、八ヶ岳連峰、南アルプス（赤石山脈）が青空に雪景色を輝かせた３日間でした。おかげさまで、過去最高の770人（事前登録464人、当日参加306人）の参加者をお迎えすることができました。一般演題には313演題（口演希望151題）の申し込みをいただき、一般口演74題、ポスター発表234題を発表いただきました。海外からは12演題でした。

本学術総会のテーマを「ライフコース･ヘルスケアを支える疫学」として、疫学セミナーから、学会長講演、特別講演、シンポジウムまで、コホート研究など生涯を通じた縦断研究に関するものに統一させていただきました。疫学セミナー「追跡データの分析A to Z」はこの分野を牽引する先生方に企画、講義をしていただき、定員を超える244名の参加で大盛況でした。「リーダーが語るコホート研究のガバナンス～立ち上げ、継続と成果の還元～」は文字通りわが国が誇る疫学者が、研究成果の裏にある苦労や葛藤、達成感を語っていただき、それを受け継ぐ若手研究者は、人と社会を対象とした疫学研究の難しさと喜び、研究ガバナンスの重要性を胸に刻んだことと思います。国立社会保障・人口問題研究所の森田朗所長による特別講演は医療制度、マイナンバーに関して国内外の状況を踏まえた俯瞰的なご講演で、思わず話に惹きこまれました。また、昨今の臨床研究推進の機運と多くの臨床医に疫学会に参加いただきたいとの思いから、学術委員会に臨床疫学をテーマにした企画のお願いをご快諾いただき、大好評のシンポジウムをしていただきました。トピックスでの日本と中国の喫煙対策、倫理指針改正、編集委員会企画での国際研究者識別子ORCID、エコチル調査シンポジウムでのそれぞれのご講演は参加者に多くの大切なメッセージをいただきました。そして、何よりも皆様の素晴らしい研究成果の発表やすべてのセッションでの熱い議論を展開していただいたことに心から感謝申し上げます。

新しい試みもさせていただきました。一つはデジタルポスター発表です。座長の先生、ご発表の先生には戸惑わせてしまったかもしれませんが、200を超えるポスターの印刷費の負担軽減

CONTENTS

第27回日本疫学会学術総会開催を終えて …… 山縣 然太朗 1
学術委員会企画シンポジウム「臨床医と共に臨床研究を推進する疫学」 …… 宮本 恵宏 2
第24回疫学セミナー「追跡データの分析のA to Z」のご報告 …… 鈴木 孝太 3
JE編集委員会企画「国際研究者識別子ORCID：いま研究者が知らなければいけないこと」 …… 松尾 恵太郎 3
「第22回疫学の未来を語る若手の集い」開催報告 …… 村木 功 4
一般社団法人 日本疫学会 各種賞の贈呈 … 5
奨励賞を受賞して …… 黒谷 佳代 5
疫学会奨励賞を受賞して …… 櫻井 勝 6
特集 倫理指針の改正
個人情報保護法の改正に伴う「人を対象とした医学系研究に関する倫理指針」の見直し－観察研究における試料・情報の取り扱い－ …… 玉腰 暁子 7
個人情報保護法の改正に伴う「ゲノムデータ」と「ゲノム情報」について …… 武藤 香織 8
獨協医科大学医学部公衆衛生学講座 …… 小橋 元 9
国際疫学会総会準備状況 …… 中村 好一 10
広報委員会・一般向け疫学紹介スライドコンテストのご紹介 …… 中山 健夫 10
事務局だより …… 11
編集後記 …… 11

は少しでも研究の援助になったのではと思っています。また、デジタルプログラムは簡易なものでありますがWEBで提供させていただきました。

一方で、ホール会場でないためのご不便や、会場案内やタイムキーパーを置かず、これらを座長の先生にお願いしたことや、参加予想人数を見誤り、当日受付の方に一時、抄録集をお渡しできないことがあったり、会場の席が足りずに立ち見をしていただいたり、Melbey教授の急病により急遽プログラムを変更させていただいたり、学会関連業者に業務委託をしなかったために、きめ細かな準備ができていなかったり、様々な対応にご不満もあったと思います。すべては学会長の私の責任です。後悔先に立たずではありますが、次回以降、より良い総会になるように、今回の経験を報告書にまとめる予定です。

最後に、身内のことではありますが、事務局として奮闘してくれた中山桜をはじめ、総会の準備、実施に尽力してくれた講座のスタッフ、関係者の皆様に心から感謝します。そして、ポスター作製からホームページの立ち上げ、演題登録、参加登録システムを全面的に担当してくれ、総会準備の一番の功労者である雨宮志乃さんとミッション終了の喜びを分かち合えなかったことが悔やまれてなりません。雨宮さん、天国から見守ってくれて、本当にありがとう。

学術委員会企画シンポジウム「臨床医と共に臨床研究を推進する疫学」

国立循環器病研究センター
宮本 恵宏

2017年１月27日に第27回日本疫学会学術総会学術委員会企画シンポジウムが、多くの聴衆を第一会場に迎え開催されました。大久保孝義先生（帝京大学医学部衛生学公衆衛生学講座）からは、人間を対象としたすべての研究が含まれる疫学は臨床研究を行うすべての臨床医が必要とし、疫学者が臨床研究にかかわることが臨床研究の質と実行性を高めるのに重要であること、高橋理先生（聖路加国際病院）からは、若い臨床医にとって臨床の現場で必要とされるEBMを理解し発信する力を持つことの重要性とリサーチマインドを持った医師を増やすための臨床疫学の教育プログラムの必要性が実例とともに紹介されました。また、村上義孝先生（東邦大学医学部社会医学講座医療統計学分野）は、生物統計家がどのように疫学研究や臨床研究にかかわってきたかを実例で示すとともに、統計の結果解釈（特にp値の多用・誤用）を例に、臨床家の生物統計的思考の理解の必要性が提示されました。そして、最後に武藤香織先生（東京大学医科学研究所公共政策研究分野）は個人情報保護法の改正とそれにともなう「人を対象とした医学系研究に関する倫理指針」の概要が示されました。質疑やコメントも多く、シンポジウムに参加された方々は、人間を対象とする研究としての疫学の重要性と研究に参加する多種多様な専門家がお互いの立場や考えを理解することが必要であることを共感されたのではないかと思います。

大久保孝義先生

高橋理先生

村上義孝先生

武藤香織先生

第24回疫学セミナー「追跡データの分析のA to Z」のご報告

愛知医科大学医学部衛生学講座　教授
鈴木 孝太

平成29年１月25日（水）に、山梨県甲府市のベルクラシック甲府で第24回疫学セミナーが開催されました。学術総会のテーマが「ライフコース・ヘルスケアを支える疫学」ということもあり、学会長の山縣然太朗先生、私とともに企画を担当した東京医科歯科大学の藤原武男先生、東京大学の近藤尚己先生と、コホート研究などで得られる追跡データなどの解析をテーマとし、「追跡データの分析のA to Z」というタイトルとなりました。

学会長の山縣先生から開会の挨拶があり、今回のセミナーの趣旨を説明していただいた後、私から、今回のセミナーでは参加者同士で講演内容について簡単にディスカッションしてもらう時間を確保するなど、参加者のネットワーキングも目的としていることや、進行について説明しました。

第１部「追跡データに関する重要なトピック」では、まず、大阪府立成人病センターの伊藤ゆり先生から、「生存解析☆アラカルト：Population-based dataによるさまざまな解析アプローチ」と題して、カプラン・マイヤー法やCox比例ハザードモデルなどの基礎的事項から、がんサバイバー生存率など、生存解析に関する新しい解析法、治験などをご紹介いただきました。次に、情報・システム研究機構統計数理研究所の野間久史先生から、コホート研究をベースに考えられる研究デザイン、解析法について「ネステッドケースコントロール研究・ケースコホート研究のデザインと統計解析」というご講演をいただきました。野間先生は、今回の演者の中で唯一の生物統計の専門家であり、その後も、統計解析に関するさまざまな質問にお答えいただきました。

一度休憩をはさみ、第２部「マルチレベルモデルを用いた追跡データ分析の理論と実際」では最初に東京大学の近藤先生から、追跡データにとどまらない「マルチレベルモデルの基礎」についてご講演いただきました。その後、東京医科歯科大学の藤原先生と私がそれぞれ「マルチレベルモデルを用いた実際の解析例１：人工乳育児は子どもの肥満の原因か？」、「マルチレベルモデルを用いた実際の解析例２：目的に応じたデータ処理と解析」と題して解析の実例を紹介しました。

最後の質疑応答では、フロアからもさまざまな質問やコメントがあり、時間ぎりぎりまで活発なディスカッションが行われました。セミナーの内容が、参加者の方々の今後の研究に、少しでも役立つと幸いです。

JE編集委員会企画「国際研究者識別子ORCID：いま研究者が知らなければいけないこと」

JE編集委員長
愛知県がんセンター研究所
松尾 恵太郎

Journal of Epidemiology（JE）は近年、国際的な医学ジャーナルの動向を踏まえ、編集委員会の規模の拡大・国際化、Open Access化など、様々な手を打ってきました。昨年夏より第一著者に対してORCID（Open Researcher and Contributor ID）登録の義務化をしました。それを受け、今回は、ORCID Inc.より宮入暢子様を演者に迎え、ORCIDの意義に関してご講演をいただきました。

学術的なコミュニケーションにおいて、そのエビデンスが「誰から」発信されたか、というのを遡及することは、簡単そうに見えて簡単なことではあり

ません。我々疫学者が研究において対象者をフォローアップしていく時の困難を、研究者コミュニティで実施するための識別子と言えるでしょう。ORCIDの「生涯にわたって使える」という特性は、身近では改姓、同姓同名の識別の問題を乗り越える事を容易にします。ORCIDは、研究者自身が提供する情報を元に、人物同定を行い、その下に教育歴、経歴、業績を一元的に管理ができる国際的なプラットフォームです。しかも登録情報の中から公開する範囲を研究者自身がコントロールできます。

今後JEでは積極的にORCIDの登録、活用を進めて行きたいと考えており、日本疫学会の会員の皆様方のご協力を改めてお願い申し上げます。

「第22回疫学の未来を語る若手の集い」開催報告

大阪大学大学院　医学系研究科　公衆衛生学
村木 功

第22回疫学の未来を語る若手の集いを2017年１月25日に開催し、102名の参加の下、盛況のうちに閉幕することができました。今回は「疫学者として生き残るコツ」をテーマに、医師以外の医療専門職、女性、非医療専門職、医師のそれぞれの立場から、伊藤ゆり先生（大阪府立成人病センター（現・大阪国際がんセンター））、馬場幸子先生（大阪大学）、北畠義典先生（埼玉県立大学）、藤原武男先生（東京医科歯科大学）の女性２名、男性２名の先生方からお話しいただきました。

「研究者・メンター・ロールモデルとのつながりを大切にする」、「効率的に目標の達成という点では育児も研究と同じであり、両立にはこだわりすぎないことも時には必要である」、「地道に努力をし、何事にも真面目に取り組んでいることを見てくれている人は必ずいる。間違った方向に進んでいないか、時々立ち止まって、自分の立ち位置を見直すことも重要である」、「有意差が出ても出なくても、ひとつのエビデンス！とにかく論文を書いて、パブリッシュしていく」のように非常に示唆に富むお話をより具体的な経験などを示しながら、ご講演いただきました。

若手の集いの後、生き残りのための裏話をはじめとした情報交換の場として、懇親会も開催しました。 89名が参加し、夜遅くまで研究者ネットワークを広げる有意義な時間を過ごしてもらいました。

一般社団法人 日本疫学会　各種賞の贈呈

第27回日本疫学会学術総会において下記の通り、各種賞の贈呈が行われました（50音順、敬称略）。

功労賞　黒沢　洋一　（鳥取大学）

奨励賞　黒谷　佳代　（医療基盤・健康・栄養研究所）
　　櫻井　　勝　（金沢医科大学）

Best Reviewer賞　桜井　良太　（早稲田大学）
　　渡辺　修一郎（桜美林大学）

Paper of the Year　田淵　貴大　（大阪府立成人病センター）
“Tobacco Price Increase and Smoking Cessation in Japan, a Developed Country With Affordable Tobacco: A National Population-Based Observational Study”

「一般の方向け疫学紹介スライドショー」コンテスト最優秀作品賞
　柿崎　真沙子（藤田保健衛生大学）
　門間　陽樹ほか（日本運動疫学会スライドショーコンテストWG）

左から櫻井先生、柿崎先生、黒谷先生、黒沢先生、磯理事長、田淵先生、門間先生、渡辺先生、桜井先生

奨励賞を受賞された黒谷佳代先生、櫻井勝先生に受賞の喜びや今後の抱負について寄稿いただきました。

奨励賞を受賞して

国立研究開発法人　医薬基盤・健康・栄養研究所
黒谷 佳代

このたびは、栄えある日本疫学会奨励賞をいただきまして、大変光栄に存じます。理事長の磯博康先生、学会長の山縣然太朗先生をはじめ、選考委員の諸先生方、ならびにこれまでご支援・ご指導してくださった先生方に心より感謝申し上げます。

私が研究に興味を持ったのは、福岡女子大学４年生の卒業研究で早渕仁美教授の公衆栄養学研究室に所属したことがきっかけでした。当時、研究の右も左も分からない私に、早渕先生は、方向性を示しながら自由に食事バランスガイドを用いた「食生活セルフチェック」の開発を担当させてくださいました。後に、「食生活セルフチェック」は特許を取得し、本当に貴重な経験をさせていただきました。そこから、「研究って何となく面白いのかも！」と思い始め、修士課程に進学することにしました。修士課程では、職域における生活習慣病予防のための栄養教育手法検証のための介入研究において、目の前の対象者の方がどんどん変わっていく姿を目の当たりにし、人を対象とした研究をやりたいと思い、博士課程への進学を決意しました。早渕先生の薦めもあり、九州大学の古野純典教授の予防医学教室の門をたたきました。

博士課程では、同級生は全員外国人で共通言語は英語。海外留学をしたいとすら思ったことのなかった当時の私にとっては、うっかり異空間に迷い込んでしまったような感覚でした。そして案の定、英語が分からず、いつまで経っても疫学の基礎も分からないような酷い状態で、古野先生の英語での丁寧なご指導にもついていけず、負のループまっしぐらの状態でした。卒後数年経ってから、古野先生が「君は、何を言っても『へぇ～、そうなんですか～』しか言わんやったね」と冗談交じりに仰り、当時は分からなさ過ぎて、質問することすらできなかった、つくづく、落ちこぼれ学生だったと思い返します。しかし、在学中、福岡COEコホートの追跡調査で、調査票のチェック、対象者の方への電話による確認、血液検体の処理など担当する機会に恵まれ、対象者の方やデータに対する古野先生の真摯な接し方を目の当たりにし、解析の際もデータの先にいる「人」を意識するようになりました。最後まで見捨てず、ご教示くださった古野先生には感謝の気持ちでいっぱいです。

博士課程修了後、国立国際医療研究センターの溝上哲也先生にお世話になることとなりました。それから現在に至るまで、溝上先生が疫学研究のイロハから優しくも厳しく叩き込んでくださいました。溝上先生は、いつも良いタイミングで成長のチャンスを与えてくださいます。今の自分の実力よりも少し上の目標を設定してくださり、それを達成できるよう、後押ししてくださり、気が付いたら成長できるという感じです。また、スリランカにおける

研究や脂肪酸に関する研究など、私自身の興味がある研究も自由に立ち上げ、進めさせてくださいました。その経験がこれから生かされていくと思います。このたびの奨励賞は、お世話になった先生方への賞であると認識しております。これから、少しずつ自分の足でゆっくりと着実に歩みを進め、それが日本の栄養疫学の発展にもつながるよう尽力して参りたいと思います。

最後に、古野先生の口癖をお借りして、「ENJOY LEARNING! ENJOY WORKING!!」を胸に日々研究を楽しみたいと思います。

■略歴

平成18年３月	福岡県立福岡女子大学人間環境学部栄養健康科学科卒業
平成20年３月	同大学修士課程栄養健康科学専攻修了
平成23年３月	九州大学大学院医学系学府医学専攻博士課程早期修了
平成23年	国立国際医療研究センター国際臨床研究センター国際保健医療研究部研究員
平成24年～28年６月	国立国際医療研究センター臨床研究センター疫学予防研究部上級研究員
平成28年７月～	医薬基盤・健康・栄養研究所　国立健康・栄養研究所栄養教育研究部食育研究室室長

疫学会奨励賞を受賞して

金沢医科大学医学部　衛生学
櫻井 勝

このたびは栄誉ある日本疫学会奨励賞を賜り、理事長の磯博康先生、学会長の山懸然太朗先生をはじめ、学会の諸先生方に深く感謝申し上げます。このような機会ですので、今回は私と疫学研究の関係について考えてみたいと思います。

私は金沢大学を卒業後、金沢大学第一内科に入局しました。糖尿病を中心とした一般内科診療に従事する一方、大学院に進学したものの動物や培養細胞を使った実験に興味が持てずにいました。見かねた研究室チーフの篁俊成先生から、臨床データの管理や予防医学について勉強してこい、との指令を受け、篁先生の同級生で当時金沢医科大学公衆衛生学におられた三浦克之先生を紹介していただきました。

毎週木曜日の午後、金沢大学から車で30分の金沢医科大学に通い、三浦先生から疫学的な考え方をマンツーマンで叩き込んでいただきました。また、教室の勉強会や循環器疾患の疫学に関するセミナー合宿に参加させていただき、臨床の教室・学会とは異なった雰囲気の中で、疫学の大御所の先生方や同年代の先生方と交流を持てたことは貴重な経験でした。

数年間、教室を出入りしているうちに、当時の教授の中川秀昭先生からお誘いを受け、金沢医科大学に移籍しました。当時は国内留学程度の認識でしかなく、また、三浦先生もすぐに滋賀医科大学に転出されたため、すぐに臨床に戻るつもりでした。しかし、中川先生や現所属の石崎昌夫教授のもとで自由に仕事ができたこと、国際共同研究や米国シカゴ留学の機会をいただき世界が広がったこと、循環器疾患や難病の疫学研究に関わるなかで国内外の多くの先生方から温かくご指導いただけたこと、また中村幸志先生（現北海道大学、2013年本賞受賞）のようにお手本となる先輩と机を並べて研究ができたことなど、この世界の居心地の良さから、気がついたら10年が経ってしまいました。

わが国でも糖尿病人口が増加するなか、糖尿病の予防に興味を持ったことも疫学研究を続けている理由です。これまでの糖尿病の危険因子に関する疫学研究の成果は、受賞講演でご紹介させていただきました。これからも、日本人の糖尿病や循環器疾患の危険因子を明らかにしていくとともに、疾病予防につながる疫学研究を継続していきたいと思います。また、大学に所属するからには、大学の一つの使命である教育にも力を入れ、疫学研究の仲間を増やしていきたいと思います。学会の諸先生方には、引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

■略歴

1997年３月	金沢大学医学部医学科卒業
1997年４月	金沢大学医学部第一内科　入局
2007年４月	金沢医科大学　健康管理センター　助教
2008年４月	金沢医科大学　健康増進予防医学（現公衆衛生学）講師
2010年４月	金沢医科大学　公衆衛生学　准教授
2012年４月－2013年４月	米国Northwestern University 留学
2016年４月	金沢医科大学　衛生学　准教授 現在に至る

特集 倫理指針の改正

平成29年５月30日から、個人情報の保護に関する法律が施行されるに伴い、人を対象とする医学系研究に関する倫理指針とヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針も改訂され、同日から施行されます。今回の特集では、指針の改定が研究に支障を来さないように国の委員会でご尽力頂いた玉腰暁子先生と武藤香織先生に、改訂の要点をまとめて頂きました。研究倫理や個人情報の目的外使用に世間の注目が高まる中で､倫理指針は無くてはならない存在になってきました。本特集が会員の皆様にとって、少しでもお役に立てることを願っています。　（編集担当：嶽﨑俊郎）

個人情報保護法の改正に伴う「人を対象とした医学系研究に関する倫理指針」の見直し －観察研究における試料・情報の取り扱い－

北海道大学大学院医学研究院
玉腰 暁子

平成27年９月９日、改正個人情報保護法が公布され、平成29年５月30日より全面施行される。「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」の見直し作業の過程では、民間業者に係る個人情報保護法（私立大学や学会、私立病院等）と独立行政法人個人情報保護法（国立大学等）、行政機関個人情報保護法（国立研究所等）、個人情報保護条例（公立大学や公立医療機関等）に微妙な違いがあることも今まで以上に意識されたが、基本的に研究対象者の権利利益保護等のために、法に上乗せ・横出しした措置を求めるものとなった。指針は９回の委員会とパブコメを経て、２月28日に告示、ガイダンスも３月８日に公開された。今回の指針では、個人識別符号が定義されたことにより、氏名や性・生年月日などの個人を識別できる情報を外しても特定の個人が識別できる場合がある（試料を用いて一定の要件を満たすゲノム解析結果を得るなど）ことから、匿名化の定義が見直されたとともに、連結可能/不可能匿名化、という用語が廃止された。

疫学研究では人々の疾病情報、健康情報を取り扱うが、病歴は要配慮個人情報と位置づけられたことから、その新規取得にあたっては、原則対象者からの同意が求められる。ただし、同意困難な（かつ学術研究の用に供する）場合はオプトアウトで行うことも可能となっている。また、既に自機関で保有している試料・情報を利用目的を変更して用いる場合には、変更前の目的と相当の関連性がある場合は通知または公開、そうではないが社会的重要性が高い研究の場合には原則オプトアウトで行える。ただし、この事項による場合には、研究機関に応じて、個人情報保護法の適用除外（個人情報保護法の適用除外の解釈が広がり、例えば、私立大学、研究所、１つの主体とみなすことができる共同研究、学会（学会に所属する医師等も含む）等が学術研究の用に供する目的で個人情報を取り扱う場合には、同法第４章の規定は適用されない）、または、行個法・独個法の例外規定（「相当な理由」「もっぱら学術研究」「特別の理由」）にも該当していることが求められる。

観察研究では、共同研究として複数の研究機関で試料・情報を収集したり、医療機関に依頼して試料・情報のみを提供してもらうことも多い。今までは、第三者提供される試料・情報について、個人を特定できないように提供元で処理して提供すれば、提供先では個人情報として扱わないこととなっていた。しかし、特定性は提供先でどのような情報を保有しているか、どのような作業を行うかに依存する。したがって、今後は提供された機関ごとの判断となり、提供元では対応表の適切な管理が求められ、提供先では提供元の手続等を確認すること、ならびに記録を作成することが必要となった。なお、手続的には、個人情報保護の法律・条例の適用除外や例外規定に該当、かつ匿名化を行ったうえで対応表を提供しないのであれば、通知または公開で提供可能である。

見直された指針は改正個人情報保護法の施行と同時に施行される。それまでに、研究機関・研究責任者は、各研究が改正指針にそっているかどうか確認し、適切に対応することが求められている。

ぜひ時間を捻出して、厚生労働省または文部科学省のHPで内容をご確認ください。（参考）http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hokabunya/kenkyujigyou/i-kenkyu/index.html

■略歴

名古屋大学医学部卒
名古屋大学、国立長寿医療センター、愛知医大を経て、2012年より現職
コホート研究を中心に人々の健康に関連する要因を検討する傍ら、研究と社会とのよりよい関係を考え、倫理的法的社会的な側面にも関心を寄せている

個人情報保護法の改正に伴う「ゲノムデータ」と「ゲノム情報」について

東京大学医科学研究所　教授
武藤 香織

2015年９月に個人情報保護法が改正されたが、2016年は医学研究への影響を最小化することに多くの時間が割かれた一年であった。研究倫理指針の改正作業では、進行中の研究が各種の個人情報保護法制の違反とならないようにする手当てが最重要視されたため、非常に複雑な改正内容となった。本稿では､「ゲノムデータ」と「ゲノム情報」について取り上げる。

2015年11月に設置された、「ゲノム情報を用いた医療等の実用化推進タスクフォース」（厚生労働省）では、予定外に法改正の対応に関する議論が行われた。結論としては、①塩基配列を文字列で表記した「ゲノムデータ」を個人情報としての保護が必要とされる「個人識別符号」に含むこと、②「ゲノムデータ」にリスク予測などの解釈を加え意味を有する「ゲノム情報」を、個人情報の中でもより高い保護を求める「要配慮個人情報」に含むこととなった。ゲノムデータ単体だけでも個人情報とみなすことや、「ゲノムデータ」に体細胞と生殖細胞の区別がないことについて、アカデミア側からは「科学的ではない」との批判が多く寄せられた。しかし、個人情報保護法は、「個人情報」を社会通念上、特定の個人を識別できるか否かという基準で判断していることに留意が必要である。

「ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針」において、生殖細胞系列の連結不可能匿名化されたゲノムデータを扱う研究では、従来は「非個人情報」だったが、今後は個人情報として保護することが必要となった。また、体細胞由来の連結不可能匿名化されたゲノムデータのみを用いる研究は、従来は「人を対象とした医学系研究に関する倫理指針」（医学系指針）の対象外だったが、新たに指針の対象となった。

なお、個人情報保護法のガイドライン（通則編）では、個人識別符号の整理として、「ゲノムデータ（細胞から採取されたデオキシリボ核酸（別名DNA）を構成する塩基の配列を文字列で表記したもの）のうち、全核ゲノムシークエンスデータ、全エクソームシークエンスデータ、全ゲノムSNPデータ、互いに独立な40箇所以上のSNPから構成されるシークエンスデータ、９座位以上の４塩基STR等の遺伝型情報により本人を認証することができるようにしたもの」と記載されているが、これはDTC検査事業者などを想定した整理であり、ゲノムデータを用いる学術研究においても同様でよいのかどうかは議論がある。

本学会としては、今回の指針改正を大きな転機ととらえ、「医療分野の研究開発に資する医療情報提供促進法案（仮称）」の動向も見つつ、医学研究における個人情報の利活用と保護はどうあるべきかについての検討を深め、今後の議論を主導する必要があるのではないか。また、今回の指針改正で全く手付かずとなった、研究対象者の保護に関する課題についても、引き続き検討が必要である。

（参考）ゲノム指針､附則解説集､チェックリスト等
http://www.lifescience.mext.go.jp/bioethics/hito_genom.html

■略歴

慶應義塾大学文学部卒業。同大学院社会学研究科修了。東京大学医学系研究科国際保健学専攻博士課程単位取得満期退学。博士（保健学）取得。信州大学医学部保健学科講師を経て､2007年より東京大学医科学研究所准教授、2013年より現職。

獨協医科大学医学部公衆衛生学講座

獨協医科大学医学部公衆衛生学講座　教授
小橋 元

公衆衛生学を通じた人間形成

獨協医科大学医学部公衆衛生学講座は、本学が開学した翌年の1974年に開講されました。私は2015年４月より第５代教授として講座を主宰しています。獨協医科大学のルーツ・母体である獨逸学協会・財団法人獨協学園の「学問を通じた人間形成」の精神に則り、講義や実習、課外活動や国家試験対策、臨床研究指導を含めた医学部の卒前・卒後教育はもとより、他学部向けの疫学・公衆衛生学講義や研究指導などで、「公衆衛生学を通じた人間形成」「プロフェッショナリズム教育」を行っています。学生たちには、臨床研修が終わった頃に疫学・公衆衛生学の重要性を思い出して、講座の扉をノックして来てくれることを期待しています。

独り立ち、力合わせる研究体制

研究面では、本学の社会医学系が細かい分野別縦割りになっていないため、当講座が医学部・看護学部を合わせて、疫学・臨床疫学・公衆衛生学の広範な領域のほとんどを担っています。そのため、講座の教育・研究を支えるスタッフの枠は６人分あり、私の他には准教授３人、助教２人の体制です。各々は、疫学・統計、臨床疫学、分子疫学、健康教育、栄養、身体活動などの専門を持っています。得意分野を生かしながら「独り立ち、力合わせる（獨・協）」ことをモットーとし、自由に力を合わせ、お互いに学び合うことで、スケールの大きい独自な発想や実践を目指しています。また、講座の目標は、基礎医学と臨床医学、大学と社会の間の調整役であるとの認識のもとに、様々な分野との間にたくさんの小さな橋を架けることです。そのためか、最近は外部や他講座からの大学院生や研究生の出入りがとても多く、明るく風通しの良い雰囲気になっています。

±１次予防を目指す成育予防医学と性差疫学

講座の研究は、私自身がもともと産婦人科医であったこともあり、「±１次予防を目指す成育予防医学」「性差疫学」を旗印にしています。従来、実施していた産科や難病に関わる複数の症例対照研究や、循環器疾患を中心とした検診・健康教育コホートに加えて、新たな研究基盤として、産科臨床・分子コホート、産科・産業ストレスコホート、栃木地域コホート、職場検診コホートを立ち上げたところです。他にもいくつかの臨床科や他大学との大規模共同研究に参加しており、いずれも将来大きな成果が期待されています。

ぜひ一緒にやりましょう！

風光明媚な栃木県壬生町で、ぜひ私たちと一緒に疫学研究の大きな樹を育ててみませんか？当講座の扉はいつも開いています。興味と志のある方はいつでも気軽にお問い合わせください。

■略歴

1989年　北海道大学医学部卒業
1989年　同　産婦人科入局・関連病院勤務
1994年　同　公衆衛生学講座助手
2001年　同　大学院予防医学講座講師
2006年　放射線医学総合研究所遺伝統計研究チームリーダー
2011年　同　研究倫理企画支援室長
2015年　獨協医科大学医学部公衆衛生学講座教授

■主な資格等

労働衛生コンサルタント
第２種放射線取扱主任者
日本産科婦人科学会専門医
日本人類遺伝学会臨床遺伝専門医

■受賞

北海道医学会賞
日本妊娠中毒症学会学術奨励賞
北海道公衆衛生協会賞
北産婦学会学術研究奨励賞
日本社会医学会学術奨励賞
日本疫学会奨励賞
日本ビル管理協会賞

国際疫学会総会準備状況

第21回国際疫学会総会会長
中村 好一
（自治医科大学公衆衛生学教室）

第21回国際疫学会学術総会（21st World Congress of Epidemiology, International Epidemiological Assoiation、2017年８月19～22日、さいたま市）まであと５ヶ月となり、組織委員会ではプログラムの作成に大わらわです。特別講演、シンポジウム等は現在最終の調整中です。状況は学会のサイト（http://wce2017.umin.jp/）でご確認ください。一般演題はおかげさまで１,000題を超える応募がありました。現在、組織委員で手分けして内容を確認していますが、基本的には口演かポスターで発表していただくことになる予定です（「疫学研究ではない」とか「倫理的に問題がある」といった演題でない限り）。ただし、一般演題採用の条件として「発表者の学会への参加登録」を条件といたします。すでに参加登録を開始しましたし、５月末までは早期の登録でレギュラー登録よりも１万円安い５万５千円（IEA非会員は６万５千円）となっていますので、早めの登録をお願いいたします。詳細は学会のサイトをご覧ください。

多くの方々のご参加により、学会を盛り上げていただければ幸いです。

広報委員会・一般向け疫学紹介スライドコンテストのご紹介

広報委員長　中山 健夫

広報委員会では、広く一般の方々に疫学を知っていただくコンテンツを充実させるため、2015年度から疫学紹介スライドコンテストを行っています。

第１回は８件の応募を頂き、広報委員会での審査の結果、最優秀賞に東京大学医学系研究科公共健康医学専攻保健社会行動学分野のグループ（小林三奈美先生、芝孝一郎先生、橋本直也先生、平川亜耶佳先生）の「社会疫学の挑戦–社会と健康を科学する–因果関係を考えよう！」、優秀賞に柿崎真沙子先生（藤田保健衛生大学）の「医学研究のデザイン」と、日本運動疫学会スライドショーコンテストWGの「疫学研究が明らかにした 身体活動・運動の効果を 川柳で紹介！」が選ばれました。第２回は５件の応募を頂き、最優秀賞に柿崎真沙子先生の「感度･特異度･ROC曲線」と日本運動疫学会スライドショーコンテストWGの「『〇〇は健康にいい』と言うためには？～身近な疑問に答えを出す疫学手法～」が選ばれました。受賞者の方々には学術総会で磯博康理事長より記念品が授与されました。

応募作品はいずれも魅力的で、柿崎先生と日本運動疫学会WGの先生方には２年連続の受賞を改めてお祝い申し上げます。作品はクリエイティブコモンズのライセンス（非営利・改変禁止）が付与され、誰でもダウンロードして活用可能です。受賞作品は学会HP「一般向けコーナー：http://jeaweb.jp/activities/about_epi-research.html」に掲載しています。

2017年度も５月１日から８月31日を応募期間として第３回コンテストを行う予定です。要項が決まり次第、ホームページに掲載させて頂きます。すでに応募された方、初めての方、多くの方々のご参加をお待ちしています。

事務局だより

1）代議員、選出理事・監事、理事長選挙について

現在、代議員の立候補を受付中です。代議員が選出理事･監事の選挙権、被選挙権を有します。 多くの会員の皆様からの立候補をお願いします（受付締切：4月30日）

★選挙権者、被選挙権者は、4月30日までに2016年度までの会費を全納している正会員です。但し、被選挙権者は、2017年12月31日までに満61歳になる会員を除きます。会費を未納の方は、是非とも納入をお願いいたします。

会費の納入については、下記URLをお読みください。

http://jeaweb.jp/about/pdf/kaihi.pdf

★選挙は4月30日時点でご登録の所属ブロックごとに行います。所属先に変更のある方は、至急事務局までお知らせください。

★所属ブロック別の代議員候補者定数は、4月30日における正会員数の概ね10人に1人の割合です。投票は正会員一人につき、所属ブロック別の代議員候補者定数以内で、無記名連記で行います。

★【2017年度 代議員選挙について（所属ブロックの確認と立候補の受付）】については、下記URLをお読みください。

http://jeaweb.jp/jeanews/files/pdf/election2017/0228.pdf

【今後のスケジュール（予定）】

4月30日：代議員選挙立候補受付締切

5月中旬：代議員選挙告示

6月初旬～中旬：正会員による投票

→　代議員決定

6月下旬～7月中旬：選出理事立候補・監事推薦受付

7月下旬：選出理事候補・監事候補選挙告示

8月初旬～中旬：代議員による投票→選出理事候補・監事候補決定

8月下旬～11月上旬：選出理事候補の互選により理事長候補選挙

2018年2月の社員総会：理事長、理事、監事の承認

2）日本疫学会奨励賞募集要項

日本疫学会奨励賞に関する細則にもとづき、以下の要件を満たす受賞者の推薦をお待ちしています。

・本会員のうち、優れた疫学的研究を行い、その成果を日本疫学会、Journal of Epidemiologyおよびその他の疫学関連学会や専門雑誌に発表し、なお将来の研究の発展を期待しうる者（原則として個人）

・受賞者は継続3年以上の会員歴を持つ本学会会員に限られ、受賞の暦年度の募集締め切り日において満45歳未満の者

※詳細は学会HP（http://jeaweb.jp/jeanews/files/syourei2017.html）をご覧ください。

推薦書の提出期限は5月1日～6月30日で、 原則として代議員からご推薦いただくこととなっております。推薦書様式は、学会HP（http://jeaweb.jp/activities/procedures.html）からダウンロードしてください。

3）日本疫学会会員数：2,063名

（2017年4月1日現在）

名誉会員：　27名　　代議員：138名

普通会員：1,898名

編集後記

今年は2005年以来の遅い桜の開花のようですが、皆様の地域は如何でしょうか。今回は、個人情報の保護に関する法律が施行されるに伴い改訂される倫理指針への対応の一助になるように、特集に「倫理指針の改定」を取り上げました。研究倫理や個人情報の目的外使用に世間の注目が高まる中で、倫理指針は無くてはならない存在になってきました。逆にみると、指針は私達の研究を守ってくれるものだと思っています。この他にも、甲府での第27回日本疫学会学術総会のご報告や国際疫学会総会のアナウンスを始め、多くの先生方に寄稿して頂きました。お忙しい中、原稿を準備して頂いた先生方と、丁寧な編集をして頂いた事務局の西野さんに感謝いたします。

（嶽﨑俊郎）

発行　一般社団法人 日本疫学会　〒113-0033 東京都文京区本郷7-2-2　本郷MTビル4階　jea@jeaweb.jp